

活動型授業への展開と課題

幸田 佳子

【要 旨】

本稿は留学生のための日本語教育の実践報告である。1年生向けの読解授業を長年教師主導で行ってきたが、学生が受け身的になって、試験の点数や単位取得だけが目的になっていた。外国語を身に付けて役に立っているという実感とはかけ離れていた。目標は自らが読み、調べたり考えたりして産出する自律的な学習法を習得することである。この目標達成のために2011年に活動型の授業を取り入れたが、言語知識の確認も含めた話し合いでは活動があまり活性化できなかった。さらにテーマ内容を深めることもできなかった。そこで2012年は言語知識や背景知識を支援しながら話し合いと発表の活動を行い、内容理解を深めていった。この一年間の前期と後期の授業計画、実際の授業例、アンケート等の実践を報告している。評価できる点と問題点を取り上げた。まだ自分の意見の形成は十分ではないが、徐々に産出できている。読解そのものは個人の読みから始まるが、自分の理解したことを仲間に認めてもらうことは大事なことである。また相手の読みから気づいたり考えたりすることはそのテーマ内容の理解を深めることになる。クラスで行う意義はここにある。ただし相手に伝わるように話さないと、理解してもらえない為その練習も必要になる。

【キーワード】

教師主導型授業 活動型授業 自律的な学習法 話し合い 発表

1 はじめに

本稿は外国語教育、日本で行う留学生のための日本語教育の実践報告である。すなわち、本学部留学生1年生向けの読解授業を活動型へ展開させた実践の報告である。その目標は大学の授業に支障なく受講できる日本語能力を養成することである。それは自ら読んで考え、自分の意見を表現できるようにすることと考えている。

近年日本人学生の大学の授業の取得に対して日本語表現力の低下が言われている。また講義形式等自主的に勉強する形に戸惑い、講義受講の方法、ゼミ演習、発表、レポートなどの技法を学ばせるところが多くなってきた。

留学生においては、上記の問題はすでに

第二言語科目の「日本語」で習得させている。日本語力における言語知識の問題はかなり違うが、講義形式以外の様々な技法は実践しているのである。

しかし目標としている自ら読み考え、自分の意見を表現できるようにすることは容易に身に付くことではない。筆者が長年行っている読解授業でも教師主導型であるため、学習者にとって受け身の授業になり教師の課題に正答を出すことが目的になってしまった。学習者は考えることなく、教師のいう答えを暗記して、試験に書いて単位を取得することで満足している。このように内容を考えることなく、試験のために字面を追うだけの勉強方法を変えていかなければ自律的なスキルは身に付かないだろう。そこで、教師主導型から学習者同士の

話し合いで内容を深める活動型へ展開していった。そこから発生した問題点を報告する。そしてこの問題を改善して2012年の授業実践、さらなる問題を考察し、活動型の授業の特徴や効果を考えていく。

2 活動型授業の実践

2-1 先行研究

活動型授業とは、細川（2008）によると「対話によって自分の考えをつかみ表現していく」授業と述べている。対話によって、自分の考えを確認し、相手の反応や発言から気づきがあるインターアクションの経験をするのである。館岡（2007）は学習者が読みで理解しているのが見えないと言う。その可視化をはかるのに協働による読解活動（ピア・リーディング）を行うのが有効であるという。これによって理解を深めるということだ。筆者が活動型の授業に展開させた理由は、まさに話し合いに意義を感じているからである。幸田（2012b）で述べているが、自分の意見を産出するための思考過程に焦点を当てていること、授業の中心が教師でなく学習者であるからだ。

学習者が読んで理解したことを教師が知るには館岡（2012）の「外化」、即ち、学習者に答えてもらうしかないのである。教師主導型の授業では教師が要点と思う部分を発問して答えてもらう形で行い、学習者が間違えれば教師の模範解答を示していた。活動型の授業では、テーマ内容について学習者同士で気軽に話してもらい（「外化」）、確かめていく形にすることで、自分の読みができていくか認知していくのである。つまり、教師主導型で教師が答えを示

しても学習者がそのまま受け取れるとは限らない。だからこそ学習者同士が思っていることを述べて、話し合いで納得してもらうのである。そのことで学習者同士の意見の一致や対立などが起き、情緒と共に記憶に残る。これを館岡（2012）は「創発」と述べている。さらにまとめて発表することで、明確に内容を理解していないと述べる事ができないことを体験して分かり、次回からの対処方法の意識ができるのである。この3つの理由一話し合いで確認すること、情緒と共に記憶に残ること、発表の体験から向上心ができること一から活動型へと展開したのである。

2-2 2011年の活動型授業の問題

幸田（2012b）で2011年の活動型の授業の成果について述べているが、ここでは授業フローと問題点を要約し、2012年の改善した授業の実践を報告したい。

筆者が担当しているクラスは必修の留学生用日本語（読解）1年生用で半期制である。学生は11名（中国8名韓国3名）中級後半レベルである。授業計画は1テーマに2回の授業を予定した。授業フローは次の通りである。

- ①本文（記事などのコピー）を読み、内容についてのシートに答えを書く。
- ②ペアかグループになり、わからない語彙や意味の確認と併せて質問シートの答え合わせなどを話し合う。
- ③まとめてから、みんなの前で発表する。質疑応答する。他のグループの評価を行う。
- ④自分の活動を振り返り、シートに書き込み、提出する。
- ⑤次週に教師が振り返りの総括したものを

公表する。

前期の具体的な目標は、様々な文章を読んで自分の言葉でまとめること、後期は、要点のまとめと意見を出すこととした。成績は質問シートと振り返りシート、そしてレポート等から評価していった。

学期末の自由回答のアンケートで学生が評価していたことは、「話し合いがとても楽しかった」「他のグループの結論が予想外で面白い」「ゆっくりと相手の考えを聞くことができ、交流ができた」であった。一方、問題点として、「話し合いがまとまらない。うまく結論が出せなかった」「思ったことが相手に伝わらない」「話す順番がうまくできなかった。論理的でない」「漢字語彙が不足している」であった。活動について自己評価してもらおうと、達成できた（1/11人）、半分（7/11人）、あまり（3/11人）であった。

このことから、活動（話し合いと発表）によって他の学生の情報は受け入れやすく、さらに共感を得る喜びを経験して印象に残ったことがわかる。また自ら気づくことは更なる知識探究へと意欲が繋がった。一方で自己評価から話すこと、特に発表がうまくできていない、伝わらないと多くの学生が感じていたようだ。その原因は言語知識の不足と述べている。さらに内容についての背景知識不足も大きく影響したと考えられる。筆者は話し合いの中で解決できると考えていたが、学生たちはあまり話さずわからないままで不安があったようだ。この認識のずれは大きな課題である。

2011年の活動型の授業の課題を挙げると①話し合い後のまとめができていない、②発表の仕方がうまくいかない、③語彙・文

法などの言語知識と背景知識の不足であった。

改善策として、

- ①については話し合いの前に役割（司会、書記、発表者など）決めたり、要点の箇条書きをしたりすることを提案する。
- ②小さい目標（例 笑顔になる、大きい声でなど）を決め、到達度を上げる。まとめの要点を板書してわかりやすくする。発表の分担をする。
- ③教師支援の形で活動の前に補う。

以上の3点を改善点として、2012年の日本語の読解授業に臨んだ。

2-3-1 改善した活動型授業の実践と問題

2012年の担当したクラスは、中級後半から上級レベル、15名（中国12名、台湾1名、韓国2名）であった。前期の目標は活動型の授業に慣れること、後期は読んで理解したことをわかりやすい発表にすることとした。改善した授業フローはまず語彙や文法などの言語知識とテーマの背景知識の共有することから始めた⁽¹⁾。すなわち学生に発問形式で答えてもらい、知識を共有した。テーマがイメージできるように、背景の情報やデータも示した。その後に各個人による本文の読みと質問シートに書き込んでもらった。教師が分けたグループに分かれて質問シートの答えの確認やコメントの話し合いをした。皆の前でグループごとに発表した。最後に個人で活動についての振り返ってもらった。12年前期の授業⁽²⁾の実践した概要を述べる。活動型の授業に慣れるために、話し合いをすることに時間をかけた。また話し合いで理解を深めることを体感していることも毎回説明した。学期初め

から5回くらいまではペアでの話し合いにした。話しやすい雰囲気を作り、話すことの抵抗感をなくしていった。そして意見を出し合いまとめてもらった。その後グループにして同じ形で話し合いと発表をしてもらった。最初は日本語で話し合うことを伝えていたが、同じ国の人のグループはどうしてもその言語（特に中国語）になってしまう。とりあえず、話し合いで伝え合うことができればよしとした。グループワークにしてから、各グループの小さい目標を立ててもらった。例えば、役割を決めること、笑顔を見せること、具体例を挙げるなどやりやすいものを書いてもらい、実行してもらった。このことで自信をつけて次の発表に向かってもらった。

「ファストフード」の記事ついてグループワークの実践例をあげる。

「ファストフード」の身近な設問、「どんなイメージがあるか」「何を食べるか」「何がファストフードだと思うか」等を出して背景知識を補った。本文の語彙や文法の確認をしてから、アンケート記事の本文を読んでもらい、質問シート⁽³⁾に答えを書き込んでもらった。その後、グループに分かれて、答えについて話し合った。グループ分けは教師が学生の特徴（男女、国別、性格など）を考えて分けた。3-4名で4グループになり、話し合っまとめていき、発表した。

「ファストフードとは何だと思うか」について

- ①グループ ハンバーガー、フライドチキンなど速い、安いが特徴
- ②グループ ハンバーガー、フライドチキン、牛丼、そば、ラーメンなどチェーン店の物

の物

③グループ 回転寿司も含まれる外で食べるもの、ファミリーレストランの食事も

④グループ コンビニの弁当やおにぎりも、学食も

①、②グループは全員の答えを全部出していた。③グループは何とか共通性を出そうと定義づけをしていた。④グループも定義づけを参考にしてはいたが、いくつも例がでてきて、まとめられなかった。

自分たちの毎日の食事を考えて、何がファストフードなのか発表していくうちに範囲が広がり線引きができなくなってしまった。現在の外食がいろいろな要素が含まれていて、簡単に定義づけができないことが分かった。ここでは一つの解答を出すわけではないので、現状が認識できたことで終了した。テーマ内容について、深く考えることができ、印象づけられたのではないかと思う。

前期では、活動型に慣れることを大きな目標としたので、うまくいく場合もいかない場合も含めて体験したことはよかった。まだグループでまとめていく形や、発表の仕方ができていなかったが、これは後期の課題とした。

2-3-2 後期授業の実践と問題

12年後期は、読んで理解したこと、それについての自分の考えをみんなにわかるように発表することを目標としているので、慣れてきた話し合いの中でまず、要点の説明ができるようになることを練習した。そして皆のいろいろな意見をどうまとめていくか考えてもらった。例えば共通性を取り出す、納得のいくのだけ述べる、全部列挙

などである。また、みんなの前での発表については、発表方法をどうしたらよいかも考えてもらった。注意点（声を大きく、読まない、笑顔でなど）や内容の提示順などは具体的なモデルを示しながら説明して、これらをみんなの他者評価や自己評価の基準にした。

実践例は「地球が危ない」で挙げる。

これは地球環境のテーマで一般論をわかりやすくした文章である⁽⁵⁾。身近なところから考えてもらおうと、本文を読む前に環境問題で知っていることを答えてもらった。地球温暖化やごみ問題、大気汚染などが上がった。毎日の生活目線から気づいたことを述べてもらい、環境問題についてのイメージができたところで、本文の読みと質問シート⁽⁴⁾への書き込みをしてもらった。その後、各グループ（3名5グループ）に分かれて話し合ってもらった。話し合いと発表について目的を板書して明確にした。それは話し合いについてはみんなの意見をまとめ上げること、発表については分担して全員で行うこととした。どんな解決策があるかも考えてもらった。

話し合いは、日本語で始まっていたが、いつの間にか母国語になっているグループが多かった。教師は各グループを回り、話し合いが弾まないグループでは一緒に考え、具体例を出した。そして話し合ったことをまとめ上げてもらった。まとめができない場合は、どんな話をしたか経過説明を話すように指示した。

①②③④グループは一般的な問題例を出していた。エネルギーの使い放題、便利さだけ考えている、ごみが増えている、道路が汚い、自動車の増加、都市に集中してい

るといった問題点から、対策を挙げていた。電気やPCのつけっぱなしをしない、割りばしやレジ袋をもらわない、ペットボトルはリサイクル、過剰包装の多いものを買わない、たばこをやめる、車より自転車、ごみの分別などである。最後に発表した⑤グループは、意見がまとまらず、経過を話してくれた。「汚すことを法律で罰すれば、ごみや汚染も減る。その例として日本では千代田区の路上喫煙禁止があり、破った人は罰金がある」という意見が出た。しかし、「法律にすればいいというものではなく、小さい時から、マナーとして教育していった方がいい」と反論も出たという。その後聞いていた学生から、ネット情報で調べだし、他の国で法律にしている例をあげてくれた。また学校で環境問題の教育があることも調べてみんなに知らせてくれた。さらにコンビニでバイトしている学生が「分別ごみは意義があるんですね」と述べた。生活の体験と授業内容がつながったことの実感だと思う。結論を出してはいないが、学生の意識の中に法律より教育を重視した方がよいという方向を見出していたようだ。このように一つの発表から啓発されて多くの意見が出たのは面白かった。この後で、振り返りをしたところ、以下の通りになった。自由回答である。

- ・よく話し合い、コメントを出せた。(11/15人)
- ・他のグループの発表で色々気づいた。(8/15人)
- ・よく考えていなかったのもっとよく考えればよかった。(2/15人)
- ・まだ発表仕方がうまくいかなかった。(1/15人)

・他のテーマ（経済問題）でも話し合いたい。（1/15人）

この振り返りを見ると、活動で各グループの情報共有と活性化ができたと思われる。それは、テーマが11年よりはやや抽象化しているが、一般的で時事の問題が含まれ、情報も理解しやすいものであったこと、また発表から気づいて発言したり、調べて述べたり、認識不足と自覚するなど内容について考え出して外へ発したこと、さらに新しいテーマでも考えたいと意欲が出たことである。言語知識の不足の問題はなく、テーマ内容についての答えが多くなった。発表の仕方についての不満は、自分の思っていたことがうまく伝わらなかったことに気づいてのものであった。

2-4 まとめと課題

最後に学期末に授業のアンケートを取った。「できるようになったこと」と「まだ不足、問題点は何か」を自由記述で挙げてもらった。

できるようになったこと

・文章の要点、キーワードの取出し、構成がわかる（11/15人）

・自分の意見や考えを表現できる（12/15人）

・色々な意見を聞いて面白かった（1/15人）

不足・問題点

・小説やエッセイの言葉や意味が難しい（10/15人）

・文章把握は大丈夫だが、自分の考えをまとめるのが不十分（4/15人）

・語彙量が不足（2/15人）

・感想を書くとき、いつも思い浮かばない

（1/15人）

・長い文章は集中力が下がる（1/15人）

12年の前期と後期を合わせてみると、語彙や文法などの言語知識の不足は補って改善は見られたが、まだ十分ではない。しかし話し合いで理解を深めていけるようになった。それはグループでの答えを質問シートに整理して書き込み、発表内容が分かりやすくなっていることからわかった。自分の考えを外へ出すことが難しいこと、その時の語彙も不足していることを認識したことは成果である。

3 活動型授業の効果と課題

活動型の授業の特徴は、各自が読んで理解したことを話し合いで確認して、他の答えを聞いて気づいたり、知識を広げたりすることである。そして意見をまとめ上げる。それをわかりやすくしてみんなの前で発表することである。

前述のように、背景知識のある学生がいると問題提起でき、周囲を巻き込みながらテーマ内容を振り下げていくことができる。しかし、いない場合は（前述では①②③④グループのような発表）意見形成において、自分の考えでなく常識的な考えやネット情報から写したもので、受け流していると思われる。

今後の課題は、その一般常識を自分の身に置き換えて考えたり、好悪の判断などをしたりするところから始め、意見形成をさせていくことである。

また発表は誰もが苦手でハードルが高い。緊張をしなくなるだけでもよしと考える。

さらにみんなにわかってもらえる話し方となると、そのスキルを練習しなければならない。

ある学生に「この授業は発表の授業か読解の授業かわからなくなった」と言われたことがある。わかってもらえる発表は毎回練習しないと、身に付かないので発表に重点が移ってしまったように見えたのだろう。しかしこの話し合いと発表はあくまでテーマ内容の理解を深めるための方法である。発表ができて満足するのではなく、その後の質問などで気づきが内容理解を深めていくことになる。また振り返りも同様である。

読解の授業に活動型授業の方法を取り入れ、実施してみた。読みの理解を深めるにはどうしたらよいかということから始まった。読む行為は個人の目的や興味などで様々な読み方がある。当然理解も自分にとって都合のいいように受け取るはずである。クラスで行う場合は、言語知識を共有した後自分の読みを仲間に認めてもらい、さらに仲間の読みから理解を深めていくことが特徴になる。一人読みよりみんなで読んだ方がよいと実感できる授業をしなければならないと考えている。

この論は、2013年7月20日 第14回国学院大学日本語教育研究会にて発表したものを修正してまとめたものである。

注

- (1) 外国語教育の中で、英語教育の教授法はよく知られている。高梨(2000)は、現在の教授法はボトムアップモデル(言語知識の積み上げ)とトップダウンモデル(予測、情報の選択、背景など)の両方を取り入れ

た相互作用モデルを実施しているという。これを参考にして教師主導ではなく、支援の形で学生のスキーマ形成を行った。内容を考えてもらうのが目的なので、知識を伝えて終わりにはしないようにした。言語知識と内容とのバランスが難しいところである。

(2) 2012年前期日本語読解Ⅰ 授業計画

1回	授業説明 日本語歴アンケート
2回	他者紹介①ペアでインタビュー まとめ
3回	他者紹介② 発表する
4回	新聞記事「花見客」要点取り コメントで全員での話し合い
5回	新聞記事を選んで①レジメに要点書き込みペアで説明 発表の仕方を考える
6回	新聞記事を選んで②発表 活動について振り返り
7回	新聞記事「新人諸氏」要点取り コメントで全員での話し合い
8回	アンケート記事「ファストフード」①読み要点取り グループで話し合い
9回	アンケート記事「ファストフード」②グループで発表
10回	コラム「自販機」読みと要点句取り全員でコメント
11回	ビデオ教材「しんちゃん」行動から心情を読み取る 全員でコメント
12回	コラム「天声人語」要点取りと説明
13回	コラム「天声人語」コメントの話し合い
14回	コラム「天声人語」の読みとまとめ

2012年後期日本語 読解Ⅱ 授業計画

1回	後期の授業説明 記事「地熱発電」要点取りとその説明
2回	コラム「天声人語」読み ペアで要点の説明 発表方法
3回	「天声人語」の続き 語彙・表現の確認 アンケート記事「後ろに座る学生」
4回	記事「学士乱立」要点取り コメントで全員での話し合い
5回	小説「なぞのロボット」結末予想① 読みグループでの話し合いとまとめ
6回	小説「なぞのロボット」結末予想② グループでのまとめと発表 振り返り
7回	記事「イグノーベル賞受賞」要点取り コメントで全員での話し合い

8回	記事「親 就活の手助け」①要点取り ペアで説明し合う
9回	記事「親 就活の手助け」②コメントも含めてペアで発表
10回	コラム「地球が危ない」① 要点取り グループで話し合い
11回	コラム「地球が危ない」② グループでのまとめと発表
12回	コラム「日々是修行」抽象文の要点取りコメント
13回	記事「カラオケの多様化」要点取り コメント
14回	総まとめ アンケート

(3) 「ファストフード」の質問シート2012年改良版

参考資料 朝日新聞2007年4月7日付 「beファストフード」

<p>ファストフードの記事を読んで話し合い</p> <p>目的 記事本文の理解と自分の考えを表すこと 理解したことを述べること さらに考えたことをみんなに話すこと</p> <p>質問 ファストフードは日本の外食文化の一部になっているという。その理由は何か。 自分の答え</p> <p>ファストフードとは何か、何があるか。 自分の答え</p> <p>グラフ統計から気づいたことを述べよ。</p>

(4) 「地球が危ない」の質問シート

参考資料日本広報協会『地球が危ない—環境を守る暮らしの提案』『文化中級日本語Ⅱ』文化外国語専門語学校

<p>【読む前に】 環境問題で思い浮かぶことを書いて下さい。言葉だけでもいいです。 身近なことでは何か。</p> <p>漢字語彙 澄み切った空 緑に覆われた 輝き 産業革命 技術革新 薪 崩れていく 汚染 飽和状態 下水道 土壌 保たれて 実践する</p>
--

内容についての質問

2段落 私たちは自然の流れとは別の生活リズムを持ち始め・・とはどんなことか。

3段落 環境問題で特に深刻な問題は何か。

4徐々に環境が悪くなっていった原因は何か。

5私たちの生活一つ一つを見直し、実践していくのは、どんなことか。

内容理解 1人作業 各段落の大事なところに下線を引くこと、簡単に要点を取り出しておくこと

1

グループでやること
グループ名

グループメンバー

話し合うこと

キーワードは何か。

筆者のメッセージ

環境問題で何に関心があるか。

振り返り

今回の話し合いはどうだったか。お互いに意見交換や気付いたことなどがあったか。

発表はどうだったか。

発表を聞いていて、面白いもの、興味を引いた意見があるか。

2

- (5) 吉田他(2000)によると、教材は読み手の文化背景を考慮して、言語能力のレベルより少し難しい程度で論旨ができるだけ明確なテキストという。構成が分かりやすいものを選んだ。

参考文献

- 池田玲子・館岡洋子(2007)『ピア・ラーニング入門』ひつじ書房
石井陽子・幸田佳子(2012a)『教師主導型から活動型のはざままで—脱タスクを目指して—』2012年度日本語教育学会実践研究フォーラム予稿集
石井陽子・幸田佳子(2012b)「教師主導型から活

- 動型授業の改善の考察—脱タスクを目指して—」『WEB版日本語教育実践研究フォーラム報告』2012年度版
- 幸田佳子（2013）『活動型授業への展開と課題 国学院大学留学生の例から』第14回国学院大学日本語教育研究会2013年7月20日発表資料
- 高梨庸雄・卯城祐司（2000）「第1章 読むという行為にふくまれるもの」『英語リーディング事典』 研究社
- 館岡洋子著（2012）関正昭編 平高史也編著『読解教材を作る』スリーエーネットワーク
- 細川英雄他編 津村奈央著（2008）『日本語教師のための「活動型」授業の手引き—内容中心・コミュニケーション活動のすすめ—』スリーエーネットワーク
- 吉田信介・吉田晴世・三根浩（2000）『「読む」こと』竹内理編著『認知的アプローチによる外国語教育』松柏社